

と表されます．この一般解  $x$  は 1 次方程式  $x - y = 1$  の任意の解を表します．また  $x - y = 1$  は 2 次元空間上の直線の方程式ですから，この一般解  $x$  はその直線のパラメータ表示にもなっています．したがって，解空間  $W$  は 2 次元空間上の直線  $\{(x, y)^T \mid x - y = 1\} = \left\{ s \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} \mid s \in \mathbb{R} \right\}$  ですね．

## 5.2.5 1 次方程式と線形写像

連立 1 次方程式の解法の研究から「線形写像」の概念が生まれ，それは数学の広い分野に適用されていきました．また，物理学などに現れる応用上重要な「線形微分方程式」にも応用されました．線形写像の詳しい議論は第 6 章 行列と線形変換で行います．以下，線形写像へのイントロダクションです．

### 5.2.5.1 3 元 1 次方程式（非連立）と線形写像

まず，3 元 1 次方程式（非同次線形方程式）

$$x + y - z = b \quad (b \neq 0)$$

から議論します．この方程式の 3 変数を成分とするベクトル  $x = (x, y, z)^T$  に対して，それを左辺の同次 1 次式  $x + y - z$  に導く  $\mathbb{R}^3$  から  $\mathbb{R}$  への写像  $f$  :

$$f(x) = f((x, y, z)^T) = x + y - z$$

を考えましょう．このとき，元の非同次方程式は  $f(x) = b$  で与えられ， $x$  が未知のベクトルになります．その一般解  $x$  は，前の §§ で調べたように，1 つの特解，例えば  $x_0 = (b, 0, 0)^T$  と，対応する同次方程式  $f(x) = 0$  の一般解，例えば  $u = (s, t, s+t)^T$  の和で与えられます．実際，解であることは容易にわかります：

$$\begin{aligned} f(x) &= f(x_0 + u) = f((s+b, t, s+t)^T) \\ &= (s+b) + t - (s+t) \\ &= b. \end{aligned}$$

さて，方程式から離れて，この写像の特徴を調べましょう． $\mathbb{R}^3$  の任意の 2 ベクトル  $x = (x, y, z)^T$ ， $y = (u, v, w)^T$  を考えると，和  $x + y$  の写像について，

$$\begin{aligned} f(x+y) &= f((x+u, y+v, z+w)^T) = (x+u) + (y+v) - (z+w) \\ &= (x+y-z) + (u+v-w) \\ &= f(x) + f(y) \end{aligned}$$

が成り立ちます．また， $x$  の実数倍  $kx$  の写像について，

$$\begin{aligned} f(kx) &= f(k(x, y, z)^T) = f((kx, ky, kz)^T) \\ &= kx + ky - kz = k(x + y - z) \\ &= kf(x) \end{aligned}$$

も成り立ちます．

この2つの性質は写像  $f$  が  $x = (x, y, z)^T$  を同次1次式に移す場合に得られます．それを確かめるのを練習問題にしましょう．ヒント：写像を具体的に

$$f(x) = f((x, y, z)^T) = ax + by + cz \quad (a, b, c \text{ は定数})$$

と書くとよいでしょう．

解答：ベクトル  $y = (u, v, w)^T$  を用意すると，ベクトルの和に対して

$$\begin{aligned} f(x + y) &= f((x + u, y + v, z + w)^T) = a(x + u) + b(y + v) + c(z + w) \\ &= (ax + by + cz) + (au + bv + cw) \\ &= f((x, y, z)^T) + f((u, v, w)^T) \\ &= f(x) + f(y) \end{aligned}$$

が成り立ちます．また，ベクトルのスカラー倍に対して

$$\begin{aligned} f(kx) &= f((kx, ky, kz)^T) = akx + bky + ckz \\ &= k(ax + by + cz) \\ &= kf(x) \end{aligned}$$

も成り立ちます．

ただし，写像が  $x$  を非同次1次式に移す場合にはこの性質は得られません．そのことを示す練習問題として，写像

$$f(x) = x + y - z + c \quad (\text{定数 } c \neq 0)$$

でスカラー倍の場合  $f(kx)$  を調べなさい．ヒントは不要ですね．

解答：

$$\begin{aligned} f(kx) &= f((kx, ky, kz)^T) = kx + ky - kz + c \\ &= k(x + y - z + c) - kc + c \\ &= kf(x) + c(1 - k) \\ &\neq kf(x) \end{aligned}$$

ですから成り立ちませんね．

また，写像  $f$  が

$$f(\mathbf{x}) = x^2 + y - z$$

のように，2 次以上の項を含む場合も上の 2 つの性質は得られません．これを示すことも練習問題にします．

解答：

$$\begin{aligned} f(k\mathbf{x}) &= f((kx, ky, kz)^T) = (kx)^2 + ky - kz \\ &= k(x^2 + y - z) + k(k-1)x^2 \\ &= kf(\mathbf{x}) + k(k-1)x^2 \\ &\neq kf(\mathbf{x}) \end{aligned}$$

ですから成り立ちませんね．

というわけで，写像に対して上の 2 つの性質が成り立つ条件はかなり厳しいといえます．しかしながら，これらの性質は非常に重要で，これを一般化して得られる

$$\begin{cases} f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}) \\ f(\lambda\mathbf{x}) = \lambda f(\mathbf{x}) \quad (\lambda \text{ はスカラー}) \end{cases} \quad (\text{線形性})$$

を満たす写像  $f$  を一般に線形写像といい，両性質はあわせて  $f$  の線形性と呼ばれます．

線形性は「行列」や「同次線形微分方程式」に現れます．ここでは，行列に関係する部分にちょっと触れておきましょう．先ほどの線形写像  $f(\mathbf{x}) = x + y - z$  は，ベクトルの内積を用いて，

$$f(\mathbf{x}) = x + y - z = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix} \cdot \mathbf{x}$$

のように表されます．この表式  $f(\mathbf{x}) = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix} \cdot \mathbf{x}$  をじっと眺めると， $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$  は写像  $f$  を具体的に表現しているかのように見えます．より応用が広がるように，行ベクトル  $(a \ b \ c)$  を導入して，列ベクトルとの積を

$$(a \ b \ c) \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = ax + by + cz$$

のように定めます．すると， $f(x) = x + y - z$  は

$$f(x) = (1 \ 1 \ -1) \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = x + y - z$$

と表され，‘ $f$  は行ベクトル  $(1 \ 1 \ -1)$  で表現された’ と考えられますね．

### 5.2.5.2 3元連立1次方程式と線形写像

3元連立1次方程式，例えば，

$$\begin{cases} x + y - z = 1 \\ x - y - z = 1 \end{cases}$$

をベクトル方程式

$$\begin{pmatrix} x + y - z \\ x - y - z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$$

として表すと，左辺のベクトルは写像  $f: \mathbb{R}^3 \rightarrow \mathbb{R}^2$  が

$$f(x) = f((x, y, z)^T) = \begin{pmatrix} x + y - z \\ x - y - z \end{pmatrix}$$

の場合であると解釈できます．

この写像が線形写像であることは， $y = (u, v, w)^T$  とすると，

$$\begin{aligned} f(\lambda x + \mu y) &= f((\lambda x + \mu u, \lambda y + \mu v, \lambda z + \mu w)^T) \\ &= \begin{pmatrix} (\lambda x + \mu u) + (\lambda y + \mu v) - (\lambda z + \mu w) \\ (\lambda x + \mu u) - (\lambda y + \mu v) - (\lambda z + \mu w) \end{pmatrix} \\ &= \lambda \begin{pmatrix} x + y - z \\ x - y - z \end{pmatrix} + \mu \begin{pmatrix} u + v - w \\ u - v - w \end{pmatrix} \\ &= \lambda f(x) + \mu f(y) \end{aligned}$$

が成り立つことからわかります．線形写像となる理由は，君たちも読めていると思いますが，上の写像がベクトルを‘同次1次式を成分とするベクトル’に移す写像だからですね．

非同次方程式  $f(x) = \begin{pmatrix} x + y - z \\ x - y - z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$  の特解  $x_0$  は  $(1, 0, 0)^T$  でよいでしょう．その同次方程式  $f(x) = \mathbf{0}$  の一般解  $u$  は， $x + y - z = 0$ ， $x - y - z = 0$  だから， $u = (s, 0, s)^T$  となり，したがって， $f(x) = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$  の一般解  $x$  は

$$\boldsymbol{x} = \boldsymbol{x}_0 + \boldsymbol{u} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} + s \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

と表されます．これは3次元空間の直線であり，その全体集合が  $f(\boldsymbol{x}) = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}$  の解空間です．この解空間は1次元で，その基底（基本解）は  $(1, 0, 1)^T$  です．

なお，一般の同次線形方程式  $f(\boldsymbol{x}) = \mathbf{0}$  については，その解空間  $\{\boldsymbol{x} \mid f(\boldsymbol{x}) = \mathbf{0}\}$  はベクトル空間であり，その基底は方程式の線形独立な解からなります．このとき， $f(\boldsymbol{x}) = \mathbf{0}$  の解空間は線形写像  $f$  の「核」（カーネル）といわれます．

さて，この線形写像  $f(\boldsymbol{x}) = \begin{pmatrix} x+y-z \\ x-y-z \end{pmatrix}$  をうまく表現することを考えましょう．右辺を  $\boldsymbol{x} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$  との積の形に表せたら成功です．実際，

$$\begin{pmatrix} a & b & c \\ d & e & f \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ax+by+cz \\ dx+ey+fz \end{pmatrix}$$

のように，積を定義する形で2行3列の行列  $\begin{pmatrix} a & b & c \\ d & e & f \end{pmatrix}$  を導入できます（上式と同類の積表現を，1855年の論文で，ケーリー（Arthur Cayley, 1821～1895, イギリス）がすでに用いています）．すると，

$$f(\boldsymbol{x}) = \begin{pmatrix} 1 & 1 & -1 \\ 1 & -1 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x+y-z \\ x-y-z \end{pmatrix}$$

のように表すことができ，線形写像  $f$  は行列  $\begin{pmatrix} 1 & 1 & -1 \\ 1 & -1 & -1 \end{pmatrix}$  によって表現されます．その表現を

$$f : \begin{pmatrix} 1 & 1 & -1 \\ 1 & -1 & -1 \end{pmatrix}$$

と書き，この行列を線形写像  $f$  の表現行列といいます．

以上の例からわかるように，連立1次方程式が  $n$  元で， $m$  個の方程式からなるときは線形写像を表現する  $m$  行  $n$  列の行列を定義することができ，行列の一般的理論を展開することができます．それを行うのが第6章であり，そこでは行列を用いて線形写像（特に，同じ集合に写像する線形変換）に関する多くの知識を学びます．